

研究テーマ：「柔らかさ」をもたらす嗅覚刺激に関する網羅的調査

札幌市立大学 デザイン学部
助教 矢久保 空遥

調査研究の要旨：

本研究では様々な嗅覚刺激に対しての感性評価語の適用可能性について調査を行い、特に「柔らかい」という表現の適用可能性がどのような嗅覚特性を持った刺激にみられるのかを明らかにする。

研究報告：

本研究では嗅覚刺激と共感的比喩表現の適用可能性を網羅的に明らかにするという目的のもと、複数の嗅覚刺激を提示し、それらに対する共感的比喩表現を用いた印象評価を実施することとしていた。

実験参加者に対して、19種類の臭質サンプルを提示しこれらの臭気に対しての共感的比喩表現を用いた印象評価を実施した。各臭質サンプルを嗅ぐ前にはコーヒー豆の匂いを嗅ぐことにより、嗅覚刺激のリセットを行なった。また、各サンプルについて評価を行なった後は5分間の休憩時間を設けることとした。共感的比喩表現には視覚・味覚・触覚・聴覚それぞれに対して本来用いる評価語を採用し、評価は「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」という7件法のリッカート尺度を用いて評価してもらうこととした。これらの評価語の中には「柔らかさ」という評価語も含め、提示順は実験参加者ごとにランダムとした。実験の結果、特定の臭質サンプルに対して一定の共感的比喩表現が当てはまるとする評価傾向があることを示すに至った。例えば、グアヤコールに対しては硬さや透明感の無さが、n-ヘプタナールに対しては明るさや鋭さといった評価傾向がみられた。しかしながら、いずれの評価傾向についても有意水準 $p < 0.05$ 以下で統計的な有意性を示すことには至らず、実験参加者数をさらに増やす必要性が示された。当初特に注目としていた柔らかさについては、n-ヘキサナール 2,4-デカジエナールに対して比較的高い値を示したが、今回の実験で採用した臭気サンプルはいずれもオフフレーバーであったことから、柔らかさを感じにくい香りが多かったと推察される。今後は、臭気サンプルをオフフレーバーのみではなく、その他の臭気サンプルにまで拡大すると共に、実験参加者数を拡大し統計的な有意性を確保した形で実験を行う必要がある。